



君の為にやってるんだよ?

彼女はユメノタメ

※実際にはモザイク修正です。

小春「でね、今度……って聞いてる？創太君？」

創太「うっうん？こっごめん聞いてなかった……」

小春とはつい先日告白して付き合い出したばかり、正直
まともに会話するのもやっと慣れて来た程度だが気を

抜けば小春に見とれてしまっ居る事があるとは言えない。

小春「もう、だからねこの前イベントで凄い人と

知り合ったんだよ！」

創太「へーそうなんだ？」

小春は漫画家を目指しているらしくその手のイベントに

度々出掛けている、創太はそんな彼女の夢を応援していた。

小春「大手の編集やつてる人に声掛けられてね、今度

作品見てくれるって！」

創太「おお凄いね、態々声掛けるなんて小春ちゃんの

作品に何か光るものを感じたんじゃない？」



小春「えへっそうかなあ〜」

その手の話しは詳しくないが態々大手の編集が声を掛ける
って言うのはそうある事ではないだろうし本当に夢に
一步近づいたんじゃないかと思う創太。

創太「うんうん、もしかしたらこのままデビューなんて」

小春「もうそんなに簡単な話じゃないんだよ、でも

いろんなアドバースとか貰えたらもっと成長できる
と思う……」

小春の夢に対する姿勢は決して浮ついた軽い物ではなく

真剣に戦っていた。

創太「(正直、夢に嫉妬してしまいそうだけど頑張ってる

小春ちゃんも可愛いし僕が支えなきゃ!)」

小春「今度の日曜はその人に作品見でもらう事に

なってるんだけど……」

創太「ん?ああ僕の方が気にしなくて良いよ頑張って!」



創太「（デートの時間を削られるのは残念だけど彼女を好きになった時、夢を知った時に応援しようと決めて居たのだから我慢しないとな）」

小春「ありがとう創太君、私頑張るね!」

創太「その人にいいアドバイス貰えると良いね」

小春「うん!」



希望に満ちた小春の笑顔に創太も嬉しくなった。

そして日曜日……

賢治「やあ小春ちゃん、良く来たね♪」

小春「こっこの度はわっ私の作品を……」

賢治「あははっそんなに緊張しなくても良いよ」

小春「はっはい……」

賢治「じゃっ早速見せて貰えるかな？」

小春「はいっ!」

賢治「……なる程ね」

小春「どうでしょうか？」

賢治「小春ちゃんはプロ目指してるんだよね？」

小春「はい」

賢治「……ならまだまだ課題が多い気がするね」

小春「そっそうですよね……例えば？」

賢治「恋愛物にしてはリアリティが足りないなあ

(へへっ本当に来るとわな、嘘でも夢見る娘は
信じやすくてちよいぜ)」



小春「リアリティ……」

賢治「小春ちゃんさ恋人居る？」

小春「っ……はいっ」

賢治「その人どこまで進んでるの？」

小春「えっ……そんな事」

賢治「大事な事だから教えて」

小春「まだ付き合い出して数回デートしただけで……」

賢治「なるほどね、じゃあこれまでに男性経験は？」

小春「ふえっ！？そっそれは……」

賢治「早く」

小春「ありません……」

賢治「だからだね、君の作品は悪い意味で嘘くさいんだよ

意図的にそう描いてるのは違ってね」

小春「そうなんですか……？」



賢治「ふっちゃんやけ編集でも何でも無いけどそれっぽい事

言っておけば勝手に納得してくれるし楽勝だな

上手くやればこの上玉の初めてをゲットできるぜ」

小春「お願いします！私のマンガどうすれば……」

賢治「簡単な話……じゃ無いんだけどなあ」

小春「私……頑張りたいんです！」

賢治「ふーんそっか……じゃあ」

賢治はゆっくりと小春に近づき後ろに回る。

小春「あの？賢治さん？」

賢治「それじゃちよつと我慢だよー」







小春「えっ……」

賢治「おほっうんうんなるほどね」

小春「あの……えっ？」

突然の事に止まる小春。

賢治「（これは思った以上に……）へへっ良いねえ」

小春「きっきやあああっ！」



小春は思わず賢治の腕を振り解いた。

小春「なっ何を!？」

賢治「あー折角君の為にやってたのに……」

小春「えっ……?」

賢治「良いか?君に足りないリアリティを掴むきっかけを
与えようとしてたんだよ?」

小春「そっそうなんですか?」

賢治「はあ……もう良いよ今日は帰りなさい」

小春「ごっごめんなさい」

小春はそう言っただけで帰って行った。

賢治「へへっこれで良い、まずは罪悪感を植え付けた
今度はたっぷり楽しませて貰うよ、そうだ一応
フォローして置かないと次に繋がらないからな
メールっとへへっ次が楽しみだ♪」



創太「どうしたの？小春ちゃん元気ないけど」

小春「うん……この前編集の……前話した人の所に行って来たんだけど失敗……しちゃって後から気にしなくても良いって言われたけど何だか申し訳なくて……」

創太「そうなんだ……でもその人もそう言うてくれてるしそんなに気にしなくても大丈夫なんじゃないかな」

小春「そうかなあ」

創太「そうだよ！こんなチャンスそうそう無いだろうし頑張ろうよ！」

小春「そうだよね……うん頑張る！」

創太は何が起きたのかも知らずただ小春を応援するのが精一杯だった。

決意を新たに小春は再び賢治の所に行く事になった。



賢治「来たね♪」

小春「あの……この前は失礼しました!」

賢治「んつまあ驚かせたこっちも悪かったし……」

でも来たって事は学ぶ意思はあるんだね？」

小春「……はっはい!」

この前みたいな事をされるかも知れないという恐怖はあつたが逃げるわけにもいかず、何より創太に応援されて居るのだと自分を奮い立たせた。

賢治「でも中途半端は許さないよ、正直俺がこれだけ

特別指導してあげるなんて事まず無いんだから

また前みたいになるならもう諦めた方がいいよ」

小春「っ……わっ分かりました」

賢治「へへっこれで罪悪感に脅しと準備はできたな

早速頂くか♪」







小春「あっあああっあの……」

賢治「んゝ何、ちゃんと体で感じてマンガに生かすんだよ」

前回程度の事は覚悟していた小春もいきなり服の中に手を入れられ、下も下着越しとは言え触つて来た事に驚く。

小春「これは……あっ幾ら何でも……」



賢治「君の為にこの俺がやってるのに何か勘違いして
ないか？嫌ならもう帰っていいよ？」

小春「うう……すみませんあつてもああつ！」

賢治「経験のない君に俺が練習台になってやってるんだ
ありがたく思えよへへっはあはあ」



小春はただ受け入れるしか無かった。

小春「ううあああつああつやつそこはっああっ」

モニ
モニ
モニ

スリ

スリ

賢治「へへっ感度良いねえおっぱいも大きいし

指導のし甲斐があるよはあはあそれじゃあそろそろ

次の段階に行こうか？」







抵抗できない小春を賢治はベッドまで運び、徐に服を脱ぎ出した。

小春「えっ！？ちよっええっ！？」

戸惑う小春の服にも手を掛け脱がして行く。

小春「やっやだっこんなのっ」

賢治「分かってねえな経験積ませてやるんだから黙って従えよ、それとも俺を怒らせてどこからもプロになれない様になりたいのか？」

小春「ううそんなんっ」

賢治「へへっそら行くぞっ小春ちゃんの初まんこいただきますっす♪」





おっおおすげつきつ
小春の初ま●こへっ
はあはあくっんっ

ズブズブ

やあっ

びん

やん

びん



あっ、やっ

んっ、やっ

ズブズブ

へへっんじや
動くよりちゃんと
この感覚を覚えろよ

んっ、やっ

んっ、やっ







いっ
あ
あ

いっ
あ
あ

ズッ

ズッ

ビクッ

ギッ

グッ

グッ

ビクッ

ギッ

へへっほらほらっ
俺のち●ぽの味は
どうだ？はあはあ



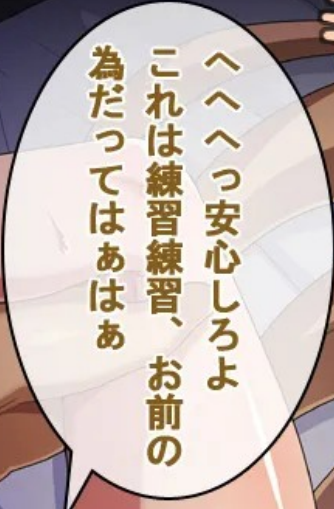
んっ
あゝあゝ

んっ
あゝあゝ

はあはあしまるゝ
初ま●こは最高だわゝ
小春良いよお前♪



ただ早く終わる事だけを願っていた。







はあはあ気持ち良い
小春の中良いよへっ
そろそろ限界っ

あやっ
あ

あやっ
あ



おほほっでるでるっ
んはあはあやべっ
気持ち良いいわ♪

はひく
はい

うう...
ああ

ド
ビュッ
ビュッ

ブルブル
ブルブル

びん

びん

この後の事は良く覚えていない、気がつけば家に帰っていた。

小春「あれ……私……賢治さんに……」

薄っすらと思い出し涙が零れる。

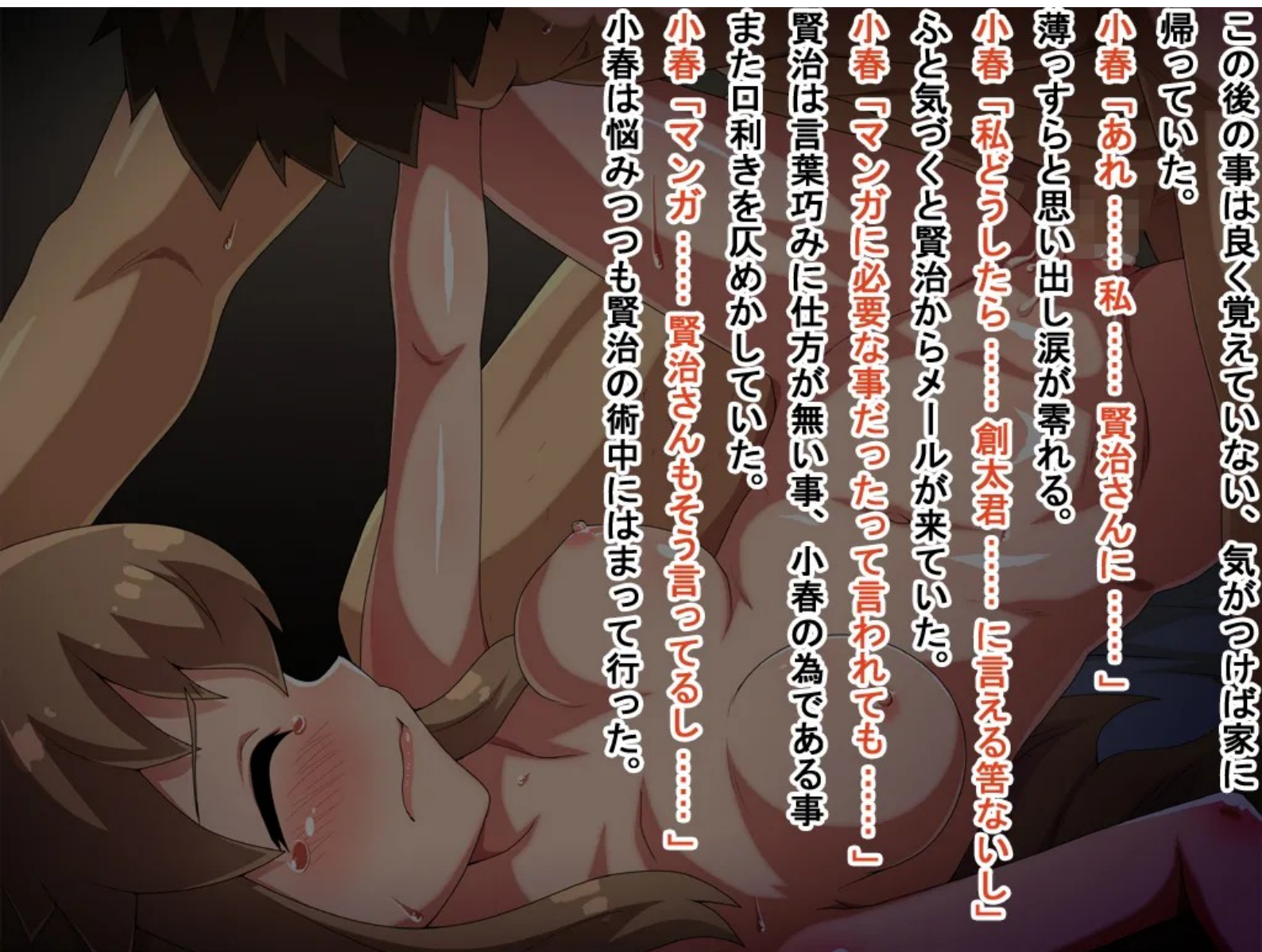
小春「私どうしたら……創太君……に言える筈ないし」
ふと気づくと賢治からメールが来ていた。

小春「マンガに必要な事だったって言われても……」

賢治は言葉巧みに仕方が無い事、小春の為である事
また口利きを仄めかしていた。

小春「マンガ……賢治さんもそう言ってるし……」

小春は悩みつつも賢治の術中にはまって行った。



創太「小春ちゃん何かあったの？暗い顔して」

小春「えっうん何でもないよ」

創太「もしかしてあの人と何かあった？」

小春「えっ……そんな事……無いよ」

創太「……何があったのか分からないけど小春ちゃんの

夢の為頑張ろうよ！」

事情を知らない創太は怒られた程度の事だろうと思い
励ましたつもりだった。

小春「創太君……そう……そうだね……」

創太「そうそう、元気だして僕にできる事なら何でも
するし手伝うよ？」

小春「えへっありがとう……私頑張るよ！」

創太「うんその笑顔、いつもの小春ちゃんだ」

小春「(創太君もこう言ってるし頑張らないと応援して
貰ってるんだから……)」







必要な事だと自分を納得させ賢治の所に通うようになった。

うづ

4フ

うん

おいしいよお小春
お前の口ま●こ最高だ
良い経験になるだろ

クチ





うん

うぐ

へへっそうそう
舌を使ってああ良い
最高だよ、そろそろ

クチ

4フ



うわっ
うわっ

んん
んん

ゴゴゴ

ビュッ
ビュッ
ビュッ

ビュッ
ビュッ

ビュッ
ビュッ

出すぞっううっつ
はあはあううっふう
へへっ出たあ



ん！
ん！

ん！
ん！

ゴクッ

ゴクッ

ちゃんと味わえよ
勉強になるだろう？
へへったまんねえ

賢治「まさからこ」まで簡単に言う事聞かせられる
とはな良いおもちゃが手に入ったぜ」

賢治「汚れちまったな風呂に移動するか……」









はあはあへへっ
良いねえ何度やっても
飽きねえぜ♪

うっ
うっ

うっ
うっ



へへっすっかり
気持ち良さそうな
声出せる様になったな

おおっ
うん

おおっ
うん

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン





はあはあ気持ち良い
小春の為とはいえ
最高だわあ♪



はっはっへへへっ
おらっおらあっ
彼氏に申し訳ないぜ



そろそろ限界だぜ
へへっもうっはっはっ
はあはあいくぞ！

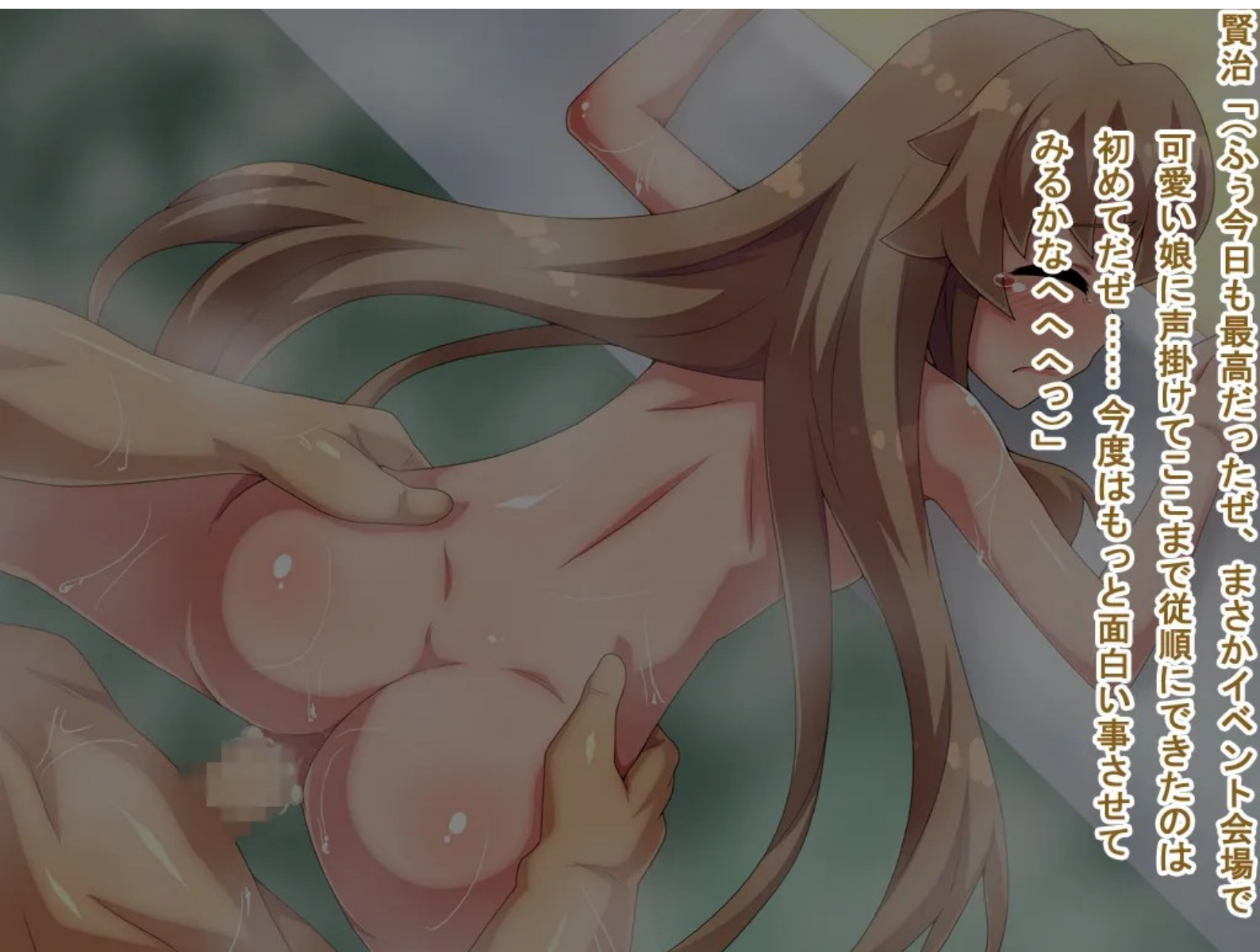


あひゃあひゃ

うあうあ

おおおっはあはあ
へへっ何度目かな？
小春に中出し♪

賢治「ふう今日も最高だったぜ、まさかイベント会場で
可愛い娘に声掛けてここまで従順にできたのは
初めてだぜ……今度はもっと面白い事させて
みるかなへへへっ」



創太「今日は急にどうしたの？嬉しいけど」

小春「えっえっと……何となく会いたくて……」

恋人から会いたいと言われて喜ばない訳がなく創太は喜んだ。

創太「そっか……そう言えばマンガの方はどう？」

小春「えっ……うん……んんっはあはあ」

創太「どうしたの？体調悪い？」

小春「ううん……ちよっとんっあっ」

創太「本当に大丈夫？」

小春「うん……大丈夫だよ」

創太「それなら良いけど……無理はしないでね」

小春「創太君……ありがとう」





ヴヴヴツと鈍い箆った音と同時に小春が声を上げる。

小春「あああっっ！」

創太「えっどうしたの!？」

小春「なっ何でもないっあっ」

創太「何でも無いつて事はないよ!？」

小春「ほっ本当に……んっ何でもないから」

小春はその場から逃げ出した。

創太「小春ちゃん……絶対何かおかしい……体調が悪いのかも知れないし、せめて送らないと」
そう言つて小春の後を追つた。



創太「はあはあおかしいなそんなに遠くに行つてない筈
なんだけど……」

息を切らし少し足を止める創太がふと路肩に止めてある
車に気がつく、スモークと目隠しされ車内は確認できない
違和感を覚えつつも見ていると。

ガタツガタツ

車が揺れていた。

創太「まさかこの車の中で誰かが……昼間から

良々できるなあ」

そう呆れつつも小春の後を追う為再び歩き出した。







お前の彼氏通り過ぎたぜ
良かったなばれなくて♪



まさか自分の彼女が
ここで犯されてるとは
思わないよなあ





へへへっいつもより
しまりが良いんじゃないん
中々スリルあったる？

あうっ

あうっ

賢治は小春の反応を楽しみながら小春の体を堪能した。
小春はもうどうして良いのかも分からずただひたすらに
賢治のおもちゃになって行った。

その事を創太は知らないまま、小春は創太に合わせる顔が
無いと思い徐々に距離をとって行った。

そんなある日、いつもの様に賢治に呼び出された小春は
目隠しをされヘッドフォンを付けさせられた。







すると徐に口に侵入してくる感触。

小春「(ああっいつもものだ……)」

そう思っ居たが……

ワキッ

ちゅー
ちゅー

アッ
バッ

ちゅー
ちゅー

アッ
ルッ

おっおほっ本当に賢治
って気づかずしゃぶって
来るぶひひひったまんねえ

俺がしつかり仕込んで
やったからなへへっ



こんな可愛い娘にはあはあ
吸われてるう気持ち良い♪
高い金払って良かった

おう、料金分しつかり
楽しんでくれよ♪



はあはあ良いぞすこいっ
あっでるでるでるでるっ
ううっはあはあでたあ

んんん

んんん

ドッ

ビュッ

ビュッ

終わったと思ったら間髪入れず再び始まり驚いた。

フキッ

フキッ

ちゅー
ちゅー

アッ
パッ

アッ
ルッ

ちゅー
ちゅー

終わったんなら早く
代われよ、おほほっこれは
すげえっああ気持ち良い

賢治以外の男は一人じゃなかった、次は俺だと言わんばかりに押しつけ挿入する。



はあはあ聞いてた以上に
上玉じゃねーかへへっ
ああ最高だぜっ！

ちゅ
ちゅ

フキッ

フキッ

アッ
パッ

アッ
ルッ

ちゅ
ちゅ



はっはっ良いぞっ上手い
へへっ良く仕込まれてる
じゃねーのあっそろそろ



はっあっおおおっでるっ
へへっああ最高だわあ
はあはあそれじゃ本番だ





今度は僕からだっぶひっ
あっあっいい小春ちゃん
だっけ? 良いよ君!



はあはあ最高のま●こだ
気持ちいいへへっ
ほらほらっどうだっ！

あうっ
あうっ

あうっ
あうっ

ズン

ズン

グン

グン



あつまうっそろそろ
こんな可愛い娘の中
に出しちゃうよっ!

ズン

ズン

ズン

ズン

あぁ

あぁ



おおっはあはあすげえっ
気持ち良いよお小春!
僕の子種を味わって!

はは

うあ

ドッ

ドグッ

ドグッ

ブルル



次は俺だっはあはあへっ
おおっしまるゝきつきつ
じゃんかへへへっ

あうっ
あうっ

あうっ
あうっ

ズン

ブン

ブン

ズン

ブン

ギン

グン

ギン

男達は欲望を満たす為、小春に群がった。

小春も途中から賢治だけではないと薄々気がついては居たがどうにも出来なかった、今更何をしても手遅れなのだと自覚していた。

今はただ流されるまま流されるだけ。





賢治「おーい小春……駄目だこりや聞いてねえやへへっ」

男A「はははっヒクヒクしてらあ」

男B「僕のテクが良すぎたかな？」

男A「んなわけねーだろ！」

賢治「へへっそうだもう彼氏とか良いよな写真

撮って送っちゃおう」

男A「えー小春ちゃん彼氏居たの？マジかよーんじゃさ

すげえ気持ち良かったって伝えといて♪」

男B「ぶひひっそれ良いな僕も中出しし過ぎてごめんね

って伝えといてよ♪」

賢治「良いぜへへっ」

小春は薄れ行く意識の中で「ああ終わって行く、夢も恋も
何もかもが……」そう思い絶望する。



創太「はあ……最近全然小春ちゃんと会えないなあ
ううん今小春ちゃんは夢の為に頑張ってるんだ
僕がそんな事言ったら足を引っ張る事になる
我慢だ我慢！うんっよし！」

ピロローン

創太「あっ小春ちゃんからだ♪」

開いた瞬間、この世の終わりかと思う位の絶望に叩き
落されるとはまだ知らない。

おわり



ああ
うう...

ビュッ

ズッ

ギョッ

グッ

はっはっしまるっ
小春の初まん♪
たまんねえぜ

ズッ

クッ

ギョッ

ビュッ

ああ
ああ



おらっおらっ
気持ち良いはあはあ
しっかり覚えろよ



あゝ気持ち良いこんなの
初めてだわ！キツキツで
ち●ぽもげそう！

うん
あゝ

うん
あゝ

ギョッ

ズンッ

フン

ビクッ

グチュッ

ビクッ

ギョッ

ズンッ





ほらほらっへっ
良い感じに気持ち良
なって来ただろう？



ああしまるっいいっ
はあはあへっふんっ
ふんっはあはあ



へへいつもより
しまりが良いじゃねーか
ばれそうで興奮したか？





おらおらっへへっ
たまんねえなあおいっ
ふんっふんっふんっ♪

あうっ
あうっ

あうっ
あうっ

ズン
ズン

ズン
ズン

ギン
ギン

ギン
ギン

ズン
ズン











































